

教務委員のみなさま、

お忙しいところごろうさまです。以下の2点を、今年度小川卒論ゼミの推薦する卒論として提出いたしますので、大変お忙しいところ誠に恐縮ですが、どうかよろしくご検討いただけますよう、お願い申し上げます。

これら2点の卒論はいずれも、普段使っていることばへのこだわりや、日常生活での出来事に対する疑問から発して、文献を調べ、文章にしていくなかで批判的視野を涵養し、問題発見をめざそうとした論文です。自分が設定した問題をさまざまな文献を調べることによって、問題を深化させ、最後に新たな問題発見と研究の方向性を示すことができたと思います。お忙しいところ、お手数をおかけしますが、よろしくご検討いただけますよう、重ねてお願い申し上げます。

『挑発するアート』 フィリピン語専攻4年 佐々木 紀

目まぐるしく過ぎていく日常の中で、あげようとした声は、想いは誰に届くこともなく忘れ去られてしまうのか。ひとはどのような時に過ぎ去った出来事や感情に想像をめぐらせるのか。筆者は在学中に自ら取り組んできた演劇を「アート」

私の祖父母とその家族は、第二次世界大戦後、満州から引き揚げてきました。その途中、私の家族も命を落としました。しかし同様に対戦国であった人々の命を奪いました。そこで残されたのはただ、悲痛な叫びだけに違いありません。私がおんなの延長上に存在するのであれば、両者が復讐に向かわない為に何が出来るのだろうか。私はそれを自分が学ばべき課題ととらえ、東京外国語大学に入学しました。そして、そのひとつの答えとしてこの卒業論文に取り組もうと考えました。

私が在学中に参加し、この卒業論文で取り上げた演劇は、いま・ここにひとの声を、想いを立ち上がらせようと試みるものです。通常、国家対国家、個人対個人、個人対国家、それぞれのレベルで声は対立し、想いはずれ違っていきます。ひとは上手に生きてゆくためにそれを忘れたいと願います。しかしそうであるからこそ、生きていくうちに忘れてしまったものを求めるのではないかとも思うのです。演劇はひとつの物語を提示します。しかし、そこに確固たる答えや正しい解釈が存在する訳ではありません。私は、アートを通して、見た人それぞれの中にある声や想いを後押しし、その人だけの答えを日常過ごす中で反芻できればよいと考えます。その為に、声をあげようとしてもあげられない同志のそばで語りかけ、声を抑えようとするものへある種の挑発をぶつけようと思うのです。

『ヒッタイトの神話・レリーフに見られる神 - ハッティとフリの影響 - 』 トルコ語専攻4年 杉田 直子

本論は、ヒッタイト国家における異民族の影響とその意味を、ヒッタイトの神話、神々のレリーフをもとに検討したものである。ヒッタイトとは紀元前20世紀ごろから前12世紀ごろまでアナトリア半島を中心に活躍した民族とその王国のことを指す。アナトリアは歴史的に常に多民族が混在する土地であったが、ヒッタイトの時代においても、そこにはハッティ、フ

リをはじめとする多くの民族が存在した。こうした異民族の存在がヒッタイトの宗教分野においてどのような影響を及ぼし、それがどのような意味をもっているのか、またそれがどのような変化を遂げたかを明らかにすることが本稿の目的であった。

具体的には、第一にハッティとフリそれぞれを起源とするヒッタイトの神話を分析し、二つの神話が、嵐の神(=天候神)の力、権威を示すものとして描かれているという共通点を導き出した。また、神話だけでなく、フリの影響が濃いとされるヤズルカヤ遺跡の神々のレリーフを対象に加えたことで、民族固有の神々に比べ、かなりの数のメソポタミア起源の神々が崇拝されていた事実が鮮明になった。さらに、神話、ヤズルカヤの王のレリーフ、そして第二章で取り上げた政治史との関連から、神に祈りを捧げる義務と権利を有する人間であったヒッタイト王が、新王国時代後期に自らを神格化したことで、「王の役割」が変化したことを指摘した。